Nara Women's University

法隆寺五重塔塔本塑像にみる女性像-服飾からの考察-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場,まみ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1421

法隆寺五重塔塔本塑像にみる女性像
—服飾からの考察—

馬場 まみ

序

法隆寺五重塔の初層の内陣四面に、多くの塑像が安置されている〔注 1〕。これらは、和銅 4 (711) 年に製作されたとされ、東西南北それぞれに、維摩詰像土 (東)、涅槃像土 (北)、分舎利仏土 (西)、弥勒仏像土 (南) の場面をあらわしている。塑像は、95 点のうち 80 点が国宝に指定されている。本塑像群は、かなり詳細に表現された人物像をふくんでおり、修理の手が入っているとはいえ、奈良時代の服飾を知るうえで重要な資料であるといえる。

これらの像に関しては、従来さまざまな考察がなされてきた〔注 2〕。しかし、それらの研究ではそれぞれの場面に対応させた男性像の解釈や仏像ついて論じられることが多く、女性像に関しては「侍者像」、「婦人像」とひとくくりにされ、詳細な検討はほとんどなされてこなかった。また、人物の服飾に関しても、資料としてとりあげられることはしばしば行なわれてきたが〔注 3〕、塑像の服飾に特に焦点をあてて論じられることはなかったと思われる。そこで、本研究では、古代服飾の系譜をたどり、一部の女性像の属性を服飾の面から考察していきたい。

1 女性像の服装

国宝に指定されている塑像のなかで、28 体が女性像である〔注 4〕。これらの女性像の服装を、袖と襟の形状に注目して分類すると次のようになる。

A 群：大袖衣と半臂（図 1～3）… 9 体
B 群：垂領・大袖衣（図 4）… 9 体
C 群：垂領・筒袖の衣（図 5）… 4 体
D 群：袍（図 6）… 1 体
E 群：その他… 5 体

A 群は、大袖衣の上に半袖の衣服を重ね着ている像である。この半袖衣は様々な名称で呼ばれているが、ここでは「半臂（はんぴ）」と呼ぶこととする。この A 群の像については後に詳しく考察する。

B 群は、襟あわせが垂領で、袖口が大きい大袖衣を着用している像である。襟のあわせはすべて右前である。袖口は、手を膝の上においた状態で、袖が床につくくらいの長さである。大袖衣は男女ともにかなりの点数の像にみられる。大袖衣は、一般に礼服に用いられる衣服とされるが、唐招提寺の「鑑真和上坐像」など奈良時代や平安時代の僧侶像の多くが大袖衣であることから、礼服以外の大袖衣の着用について今後検討する必要があると考える。

図 1～3 侍者像（東－5）

図 4 侍者像（東－10）

図 5 侍者像（東－8）

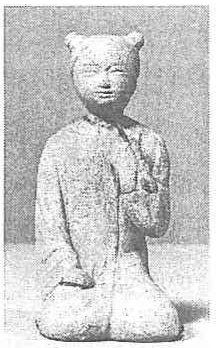

図 6　侍者像（西－31）

図 7 歌唱俑

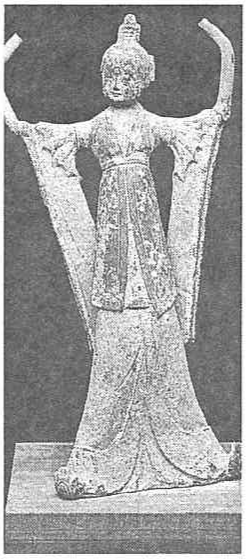

図 8 彩絵舞女俑

図 9 加彩　女子立俑

図 10 第 103 窟東壁北側
維摩経変相部分

図 11 行道天王図

図 12 彩絵釉陶武官俑

図 13 吉祥天像

図 14 女神坐像

図 15 板絵神像

図 16 法華経陀羅尼品

図 17 玉虫厨子宮殿部正面

垂領で筒袖の衣を着用している像をC群とする。筒袖の衣の襟あわせは、2体が右前、2体が左前である。D群は、盤領の袍を着用している像である。この像も左前に襟を重ねている。左前の襟あわせの袍は正倉院に遺品があり、女性用と推定されているものもある〔注5〕。袍を着用した女性像は日本ではあまり見られないが〔注6〕、女性が袍を着る場面や状況についても今後検討すべき課題であると考える。D群は、上記に含まれない衣服を着用した像とする。

本論文では、数の上でも多くをしめるA群の服装について考察を行なう。A群の像は、大袖衣の上に半臂を着用し、その半袖の腕部分を括ったような形に作っている。そのため、半臂の袖口部分が襞をとったような形状で広がっている点に特色がある（図2）。

A群の像の着装全体を、服装が詳細に表現されている東－5・6像を中心にみていく。半臂の下には、大袖の衣服を着用している。大袖衣は、袖口が大きく、身頃につながるあたりは細くなっている。大袖の袖口部分は別布で装飾されているようである。袖口は、手を膝の上に置いて床に届くくらいの広さである。その下に筒袖の衣服を着ている。この衣服の袖は長く手全体を覆っており、手は膝上に置いている。

A群の像すべてではないが、半臂の襟が後身頃で大きな三角形を作っている。この三角形の襟は、他に類例がみられない特徴的なものである。この塑像に見られる襟よりかなり小さいが、後ろを三角形にする襟の例として、唐衣の襟と僧服の僧綱襟がある。平安時代の唐衣は奈良時代の背子が変化したものといわれているが、塑像にみる衣服の襟とのつながりは不明である。

半臂の襟開きは、いわゆるVネックの形状で、襟元の前面にはフリル状の装飾布がつけられているものもある。丈は、腰を覆うくらいの長さであることが、後姿から判明する。裾には数センチの縁取りがなされている。半臂の上から領巾を巻いている。領巾は、首の後ろから前に布をまわし、そのまま腋の下を通って後ろに流している。その領巾の上に、三角形の襟をかぶせている。胴のほぼ定位置に帯を結び、背面で帯から布を垂らしている。左肩に肩章をつけ、首飾りをつけている像もある。

下半身には、裳を着用していると考えられる。裳のうえに三角形の蔽膝（へいしつ）、つまり膝覆いを着けている。蔽膝の両側は、三角の布で装飾されている〔注7〕。この蔽膝はA群の女性像のすべてにみられるものではない。

本論文では、袖括りのみられる半臂を着用するA群の像について、衣服の特徴から像の属性について考察を行なうこととする。

2 中国における半臂

日本の古代服飾を考える上で、中国の状況を知ることは不可欠である。そこで、袖の装飾に特色がある半袖衣が、中国でどのように着用されていたのかをたどっていく。中国の絵画や像をみると、この種の半臂は漢代から着用されており、以下のような像が現存して

いる〔注 8〕。

①「歌唱俑」(図 7)

成都市封家碾製材工場から出土した泥質紅褐陶の俑である。漢代の作で、袖口に装飾がある半臂を着用した比較的早い例といえよう。この像の衣服構成はあまり明瞭にみることはできないが、丸襟の衣服の上に垂領の大袖、その上に半袖の衣を重ねている。その半袖衣の袖口にプリーツ状の布を縫いつけているように見える。胴には幅の広い帯を締めている。漢代の作で、襞の装飾のついた半臂を着用した出土例は他にもみられる〔注 9〕。

②「彩絵舞女俑」(図 8)

北魏時代の像である。これは、楽器を演奏する女性など同様の像が数点ある中の一体である。手先よりも長い筒袖の衣服の上に大袖衣を重ね着ている。その上から半臂を着用している。袖の装飾は、プリーツ状の布を袖口に縫いつけているように見える。

③「加彩女子立俑」(図 9)

彩色された華やかな俑である。やや幅のある筒袖の上に大袖衣を着用し、その上から半臂を着ている。大袖衣の袖口には、別布の縁飾りをつけて装飾している。半臂の袖には、二段の装飾布がつけられている。襟は丸首で大きく開き、肩には披肩をつけている。半臂は腰が隠れるほどの丈で、下半身には裳と蔽膝をつけている。蔽膝の両側には、三角形の装飾がつけられ、裳は縦縞文様である。胴の高い位置で帯をしめ、全体に細身に作られている。唐代には、同様の服装の俑を数点みいだすことができる。この俑にみられる服装は、大袖衣の上から半臂を着用し、その半臂の袖が装飾されていること、蔽膝の両側に三角形の装飾がつけられているという点において、法隆寺の塑像と類似する服装と見ることができる。

唐、五代には、袖口を装飾した半臂の例は、他にも多くみることができる。四川省成都の前蜀・王建墓には、石棺座の周囲に座楽伎と楽舞伎の浮彫りがある。座楽伎は 8 名の女性が描かれているが、すべての女性が袖口に装飾布をつけた半臂を着用している〔注 10〕。

④「敦煌第 103 窟東壁北側の維摩経変相部分」(図 10)

唐代の敦煌壁画である。ゆったりした首周りの下着を着用し、その上から大袖衣を着ている。さらにその上に半臂を着、その袖に襞のある装飾をつけている。腰から下に裳を着用し、その上に細長い三角形の装飾のついた蔽膝をつけている。ゆったりとした着装であるが、衣服の構成としては法隆寺塑像 A 群の女性像と同じである。

「行道天王図」にみる功徳天の図(図 11)も同様の姿である。大袖衣を着用し、腕に装飾がつけられている。この袖の装飾は、襞飾りのある半臂を着るのではなく、大袖衣に直接飾り布を縫い付けることによって表現しているように見える。また、その装飾は定型化した形で描かれている。功徳天は吉祥天であり、天部形の女性仏像の袖に襞飾りがつけられている例である。

以上のように、中国の女性像では、袖口に装飾を施した半臂は漢代から着用されており、

舞女や楽人の像に多くみられる。すなわち、襞飾りのついた半臂は、一般女性というよりは踊りや楽器の演奏で仕える女性の服装であったと推測できる。半臂につけられたこの装飾については、「半臂の袖口は非常に広く、さらに袖口にプリーツを付けたものもある」〔注11〕と解説されており、袖口にプリーツを縫い付けていたようである。しかし、襞のついた半臂を大袖衣の上に重ね着ることは実際の着用には不便であったため、後には襞の装飾だけを袖に縫いつけるようになったとされる〔注12〕。

漢代から着用されてきた舞人や楽人のこうした衣服が、仏に仕える天部の仏像や供養者の衣服となった。袖飾りが一層装飾的に表現されるようになるとともに、飾りを袖に縫いつけるという簡便な縫製になったと考えられる。「行道天王図」の功徳天のような大きな袖飾りをつけた姿は、晩唐期以降は仏教絵画以外ではほぼ見られなくなる。すなわち、半臂の襞飾りは定型化し、仏像や供養者の衣服に象徴的な装飾として描かれるようになったと考えられる。唐代までは、俗形の衣服でもあったため袖を装飾した半臂は実際に着用されたが、晩唐期以後は象徴的な衣服として描かれるようになり、現実に着用される衣服ではなくなったのではないかと推測できる。

男性像にも同様の袖の装飾が見られる。唐代には、「彩絵釉陶武官俑」（図12）など武人像に多く見られる。半臂の装飾は、女性の場合は舞人や楽人、男性の場合は武装にみられる装飾である。すなわち、男女とも、身体を動かして奉仕する人物の装飾の特色とみることができよう。こうした特色を有する服装が、仏に仕える人物像、すなわち天部の仏像の衣服となったのである。半臂の袖飾りの起源は不明であるが、楽人や武人など身体を使って奉仕する人々に特にみられることから、装飾的効果を高めることが期待されたのであろう。また、腕に装飾をすることに呪術的な意味をもたせていたとも考えられる。

3 日本における羯磨衣

日本の絵画や像を見ると、袖に装飾のある衣服を着用した女性は、天部の仏像に多くみられる。「塑像吉祥天立像」（東大寺法華堂）、「塑像吉祥天立像」（法隆寺金堂）、「吉祥天像」（薬師寺）などにその衣服を見ることができる。薬師寺の「吉祥天像」（図13）は、先に述べた敦煌壁画103窟の女性像や「行道天王図」の功徳天像と類似する服装であり〔注13〕、中国の天部像に倣って製作されたのである。平安・鎌倉時代以後の吉祥天像もこのような姿で作られることが多く、天部の女性像は、襞飾りのある半臂を着用することが一つの特色となっていたと推測される。

男性の天部像も、中国と同様の服装である。奈良時代の作では、「四天王立像」（東大寺法華堂）「四天王立像」（法隆寺字食堂）などがある。

このように、日本は中国から仏像の様式を取り入れ、中国での天部の仏像の服装が日本における天部像の服装となったのである。日本では、襞飾りのある半臂を着用する服装は、仏像の衣服として取り入れられたと考えられる。

これら天部像の衣服の名称は、『覚禅鈔』には「襠襠袈裟」または「襠襠衣」〔注 14〕と記されている。また、『両部曼荼羅随聞記』には「羯磨衣」という名称が記されている。同書には、「四波羅蜜の服。袖にびらびらあり。此をびりやうと云。身のあかぬやうなるを羯磨衣と云。」「十波羅密は皆定徳の故に波羅蜜形なり。故に羯磨衣を著す。羯磨は作業の義にして此服作業に便なればなり。(中略) 故に其国王の官女の作業の時の服は皆此羯磨衣なりと。」〔注 15〕と書かれ、袖の飾りを「びりょう」と呼ぶこと、作業着であることが記されている。「羯磨」には、「業、所作、事、弁事、弁事作法」〔注 16〕の意味があり、羯磨衣が作業着の意味をもつようになったのであろう。作業着と考えると、もともと中国で身体を使って仕える人物の服装から発展し、天部の仏像に取り入れられたという衣服の系譜に合致する。『両部曼荼羅随聞記』は江戸時代の書物であるため、奈良時代にどのように呼ばれていたかは不明である。天部の仏像の衣服は、平安・鎌倉時代に「襠襠袈裟」または「襠襠衣」、江戸時代には「羯磨衣」とも呼ばれていた。「羯磨衣」という名称が奈良時代にまでさかのぼるものではないとも思われるが、本論文では、日本におけるこの形の衣服を「羯磨衣」、袖の襞飾りを「びりょう」と呼ぶこととする。そこで、日本の絵画や像に描かれた羯磨衣を着用した人物像の特色について考えてみたい。

天部の仏像の他に羯磨衣を着用している例として、神像がある。許波多神社「女神坐像」(図 14) は、大袖衣の上に二段のびりょうがつけられた羯磨衣を着用している。平安時代の男神は束帯姿も多く見られるが、この女神と一対をなす「男神坐像」も、羯磨衣である。一部の神像は、仏の姿に倣って製作されたのである。

薬師寺の「板絵神像」(図 15) も羯磨衣を着用している。この女性神像は、八幡神社の南北脇殿の柱間障子に用いられた板絵に描かれた像である。袖のびりょうは、大袖衣にそって目立つように描かれている。天部の仏像と同様の姿をした女性神像は他にも数多くみられ、この衣服が神仏に象徴的な服装とみなされていたと推測することができる。

平安時代以後の仏教画にも羯磨衣姿の女性がしばしば描かれるが (図 16)、びりょうの表現など全体の服装は、中国の唐時代以降の天部像や供養者の衣服とほぼ一致している。

次に、びりょうがどのように描写されているかをみていく。法隆寺「玉虫厨子」の宮殿部扉には神将像が描かれており、その着衣が羯磨衣である。この神将像の羯磨衣は、腕を紐で括ってびりょうをつくりだしている (図 17)。一方、薬師寺「吉祥天像」などは、襞飾りの布を縫いつけているように見える。これは、中国の半臂につけられた襞飾りと同じ形で描かれている。また、平安時代以降の仏教絵画や神像にみられるびりょうは、大袖衣に襞飾りを縫いつけているように表現されている。形も定型化している。これは、中国の唐代以後の半臂にみられる襞飾りと同様の描写である。びりょうには、袖括りによって生じる襞、半袖衣の袖口に縫いつけられた襞飾り、さらには大袖に縫いつける襞飾りという描写がみられる。

では、びりょうのついた羯磨衣は、現実に着用された衣服であろうか。大袖衣の上に半

袖の衣服を着用する形式は、古代にたびたびだされた衣服令にはみられない着装形態である。また、『万葉集』や『古事記』にも、羯磨衣形の衣服と想定される着衣の記述はみられない。平安時代以降、羯磨衣は仏教絵画や絵巻物の仏教世界を描く場面ではしばしば見られるが、それ以外の場面ではほぼ見られない。実物遺品も、現存していない。これらのことから、羯磨衣は、現実に着用される衣服ではなかったと推定できる。羯磨衣は、仏教的世界を象徴する衣服と認識されていたと考えられる。

羯磨衣が天部の仏像や天女、供養者のみに特徴的な衣服であるとすると、法隆寺五重塔塔本塑像のA群の女性像は、こうした性格をもつ像であるとみることができる。これらのなかには、天女や吉祥天像に特徴的にみられる三角形の飾りのついた蔽膝を着装している像もあることからも、仏教的性格の強い像であることが想像される。さらに、東－5・6・7の女性像は、損失部分もあるが首飾りをつけている。この時代の女性を描いた絵画や像の遺品は多くはないが、俗形の女性が首飾りをしている例は見られない。『万葉集』にも、玉を首にかける記述は一首しかみられない〔注17〕ことから、当時俗形で首飾りをする習慣はほぼ存在しなかったと考えられる。一方、吉祥天像など天部の仏像は男女ともに首飾りをしており、首飾りをする像は仏像として制作された可能性が高いと考えられる。すなわち、首飾りをつけている東－5・6・7は、天部の仏像として作られたのではないかと推測できるのである。東－5・6は、方形の台座と円形の台座の上に安置されていることも、この像が重要な存在であったことを推測させる。

まとめ

法隆寺五重塔塔本塑像のなかで、袖に特徴のある衣服を着用した女性像について考察をおこなった。その結果、この特徴的な袖の装飾は、古くは中国漢代の舞人や楽人にみられ、唐代には天部の仏像や天人、女性供養者の衣服として描かれるようになったことがわかった。さらに、晩唐期以後は、多くの仏教絵画の仏像や供養者にこうした袖飾りがみられることから、これらの人物を象徴的に表現する装飾として描かれるようになったと推測した。

日本における羯磨衣は、中国の仏画に見られる女性像をとりいれ、吉祥天など天部の仏像の衣服として描かれた。一方、仏教的世界を表現した場面以外のところでの羯磨衣の着装はみられないことから、現実に着用された衣服ではないと推測した。

こうした衣服の特色から、法隆寺塑像の女性像の中で羯磨衣を着装した像の一部は、天部の仏像であろうと推測した。

本研究をまとめるにあたり、元奈良女子大学教授相川佳予子先生、奈良女子大学教授岩崎雅美先生をはじめ奈良女子大学古代服飾研究会の皆様から多くの御教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

注

〔1〕 法隆寺五重塔塔本塑像の概略については、主に以下の資料を用いた。
奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 3 法隆寺 3』岩波書店、1979 年
法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝 3』小学館、1996 年
西川新次『法隆寺五重塔の塑像』二玄社、1966 年
長広敏雄ほか『法隆寺五重塔の塑像』岩波書店、1974 年

〔2〕 以下のような論文が発表されている。
久野健「法隆寺五重塔北面涅槃像をかこむ人物像」(『仏教芸術』4、1949 年)
町田甲一「法隆寺塔本塑像中の一次追加像について」(『仏教芸術』48、1962 年)
町田甲一「法隆寺五重塔北面における異形の鬼神像及び七躰の僧形像について」(『上代彫刻史の研究』吉川弘文館、1977 年、初出 1961 年〈『国華』834〉)

〔3〕 高橋健自『歴世服飾図説』思文閣出版、1975 年、p.58。関根真隆『奈良朝服飾の研究 本文編』吉川弘文館、1974 年、p.52, 66, 69, 88, 118, 172, 243, 245 など。

〔4〕 塑像の解説によって像の性別や番号に多少の違いはあるが、本論文では、町田甲一「五重塔塔本塑像」(『奈良六大寺大観 3』、前掲〔注 1〕) に従っている。

〔5〕 関根真隆『奈良朝服飾の研究 本文編』(前掲〔注 3〕) p.87。

〔6〕 昨年、出雲市の山持遺跡で吉祥天とされる女性と袍を着用した女性を描いた板絵が出土している (2006 年 10 月 5 日付『毎日新聞』)。

〔7〕 この蔽膝については、田中陽子「薬師寺吉祥天女像の服飾に関する一考察一中国歴代女子服との比較から」(『国際服飾学会誌』16、1999 年) に詳細に論じられており、参照した。

〔8〕 像と絵画の解説は、出典資料を参照した。

〔9〕 「繡襖を着た後漢女性 (四川省成都永豊後漢墓出土の陶俑)」(周汎・高春明『中国五千年 女性装飾史』京都書院、1993 年) などがある。この像は、半臂の袖に襞飾りをつけて装飾している。頭に美しい飾りをつけており、晴れやかな場面での姿であることが推測できる。

〔10〕 沈従文『中国古代の服飾研究』京都書院、1995 年、p.320。

〔11〕 『中国五千年 女性装飾史』(前掲〔注 9〕) p.219。

〔12〕 孙机『中国古舆服論叢』文物出版社、2001 年、p.227。この記述は、田中陽子「薬師寺吉祥天女像の服飾に関する一考察一中国歴代女子服との比較から」(前掲〔注 7〕) に引用紹介されている。この原文資料は、田中陽子氏にご提供いただいた。深く感謝申し上げる。

〔13〕 吉祥天像の服装については、以前詳細に考察を行なった。岩崎雅美・岡松恵・片岸博子・原田純子・馬場まみ「薬師寺吉祥天像の服飾について一仏画と実相の視点から」(『日本服飾学会誌』19、2000 年)。岩崎雅美・岡松恵・片岸博子・原田

純子・馬場まみ「薬師寺吉祥天像の服飾における中国西域の要素について―髪型や上衣を中心に」(『日本服飾学会誌』20、2001年)。
〔14〕『覚禅鈔』(『大日本仏教全書』56、講談社、1971年) p.140。
〔15〕『両部曼荼羅随聞記』(『慈雲尊者全集』8、思文閣出版、1977年) p.161, 293。
〔16〕『総合仏教大辞典』法藏館、1987年。
〔17〕楢崎久美子「『万葉集』に詠まれた玉」(本書所収)。

図版出典

図1,3-6 「侍者像 (東5, 10, 8, 西31)」奈良時代、法隆寺蔵
『法隆寺の至宝』3、小学館、1996年、p.55, 60, 58, 132
図2 「侍者像 (東5)」奈良時代、法隆寺蔵
『奈良六大寺大観3 法隆寺3』岩波書店、1979年、p.46
図7 「歌唱俑」後漢、四川省博物館蔵
『中国の博物館 第2期第4巻 四川省博物館』講談社、1988年、図版58
図8 「彩絵舞女俑」北魏、台湾歴史博物館蔵
黄能馥・陳娟娟『中華歴代服飾芸術』中国旅游出版社、1999年、p.168
図9 「加彩 女子立俑」唐、大阪市立東洋陶磁美術館蔵
『大唐王朝 女性の美』図録、中日新聞社、2004年、p.70
図10 「第103窟 東壁北側 維摩経変相部分」唐、敦煌石窟壁画
『敦煌石窟』平凡社、1982年、図版145
図11 「行道天王図」唐、大英博物館蔵
『大英博物館スタイン・コレクション2 敦煌絵画Ⅱ』講談社、1982年、図版16
図12 「彩絵釉陶武官俑」唐、陝西省博物館蔵
『陝西陶俑精華』陝西人民美術出版社、1987年、図版47
図13 「吉祥天像」奈良時代、薬師寺蔵
『奈良六大寺大観6 薬師寺』岩波書店、1980年、p.207
図14 「女神坐像」平安時代、許波多神社蔵
京都国立博物館編『神々の美の世界』産経新聞社、2004年、p.30
図15 「板絵神像」鎌倉時代、薬師寺蔵
『奈良六大寺大観6 薬師寺』岩波書店、1980年、p.217
図16 「法華経陀羅尼品」平安時代、太山寺蔵
奈良国立博物館編『仏教説話の美術』思文閣出版、1996年、p.10
図17 「玉虫厨子 宮殿部正面」飛鳥時代、法隆寺蔵 同上p.54